

若杉山辰砂採掘遺跡の 歴史的価値と活用



6月21日に国の文化審議会は、阿南市水井町にある「若杉山辰砂採掘遺跡」を国史跡に指定するよう文部科学相に答申しました。本遺跡は、朱の原料である辰砂鉱石の採掘のあり方を示す全国唯一の遺跡として、歴史的価値が高いと評価されました。遺跡は、私たちの祖先が生き、命を繋いできた証です。阿南市の「宝庫」である「若杉山辰砂採掘遺跡」をどのように守り活用し、次の世代へ受け継いでいけば良いか考えていきましょう。

近年の調査

1980年代の博物館の調査以降、積極的な調査は行われていませんでしたが、平成27年から徳島県教育委員会が主体となり、博物館と阿南市が協力し、「若杉山遺跡の国史跡」をめざしたプロジェクトが始まりました。初年度からの2年間は、既存資料の再検討や遺跡範囲確認のための詳細な現地確認（踏査）を行いました。



辰砂採掘地点（露天採掘地点）（写真提供：徳島県）



辰砂採掘跡 坑内内部

そして、平成29年度から2年かけて、辰砂採掘の痕跡を確認するための調査として、徳島県教育委員会と阿南市が合同で発掘調査を実施しました。県は新たに確認された遺跡範囲内において、地質学の知見を基に、辰砂が産出されやすい地点である石灰岩体とチャート岩体の境目の熱水が貫入しやすい地形岩相境界上の地点で調査を実施し、「辰砂の露天採掘の状況」を確認しました。

若杉山辰砂採掘遺跡は、弥生時代後期から古墳時代前期（1世紀半ばから4世紀初め）にかけての、辰砂と呼ばれる鉱物を採掘していた遺跡です。この時代では全国で唯一。阿南市にしかない遺跡です。辰砂とは、水銀朱といわれる赤色顔料や液体金属である水銀を作り出す原料で、古代では非常に貴重な鉱物として扱われていました。古代中国では不老長寿の薬として飲まれており、弥生時代から古墳時代にかけての日本では、主に位の高い人物のお墓に塗るなど、埋葬の儀礼として使われていました。本遺跡は、県南部を東西に流れる那賀川中流域右岸の、水井町の山の中に位置しています。水井町には、那賀川の支流である若杉谷川が南北に流れており、那賀川との合流部より若杉谷川沿いの遍路道を1キロメートルほど南に進んだ東側の急峻な山腹斜面があり、その一帯が遺跡範囲です。

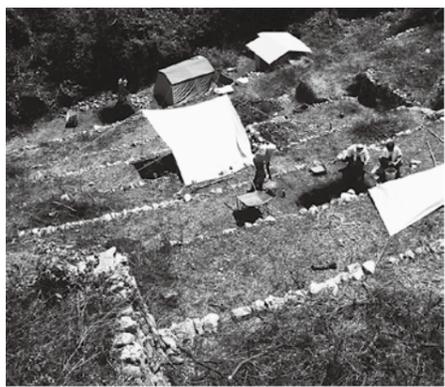
調査の歴史

遺跡が初めて発見されたのは戦後すぐのことで、ミカン畑の開墾の際に多くの石杵などが発見されました。昭和29（1954）年には、当時富岡西高等学校教諭の常松卓三さんが現地調査を実施し、そこで初めて若杉山遺跡が「弥生時代末から古

市は平成29年1月の踏査で確認された「チャート岩盤を穿つ横穴」を調査。その結果、横穴は「辰砂獲得のために掘り進められた採掘坑の跡」であることが分かり、さらに内部の発掘調査から出土した土器からこの採掘坑跡は「弥生時代後期から採掘が開始された」ことが分かりました。（※ただし、古代・中世の土器も混じることから後世に改変された可能性も考えられます）

調査成果から分かったこと

地表に露出する辰砂脈を包含する岩盤を、石杵などの道具を利用して、岩盤を打ち割ることにより辰砂鉱石を獲得していること。また、採掘方法は「露天採掘」と「岩盤を穿つ方法」であることが分かりました。遺跡内には採掘によって生じた不要岩石である破碎礫が周囲に廃棄され「ズリ場」を形成し、現在もその痕跡を残しています。採掘後に獲得した辰砂鉱石は、採掘場所とは別の地点に運ばれ、石杵・石臼を利用した粉碎作業を現地で行っていました。今回の調査で、辰砂の採掘地点が特定されたことにより、過去の調査成果を踏まえた結果、若杉山遺跡が明確に辰砂採掘遺跡としての位置付けができたことが重要な成果です。



若杉山遺跡発掘調査（写真提供：徳島県）

墳時代初頭の辰砂採掘遺跡」として認知されることとなります。本格的な学術調査（発掘調査）は1980年代に入ってからで、徳島県博物館によって実施されました。調査場所は、多くの遺物が発見されていたミカン畑跡地で、この場所から石杵・石臼などの採掘に用いられた石器が約350点出土したほか、弥生時代後期から古墳時代初頭の土器、勾玉、鉄製品、辰砂鉱物、貝類などが発見されました。この調査で本遺跡は「弥生時代末期から古墳時代初頭の辰砂精製遺跡」としての裏付けがなされました。また全国的にも前例のなかった「辰砂精製遺跡」の調査は、学史上非常に重要な位置付けであったといえます。しかし、この時点では明確な採掘場所および採掘方法の特定までには至りませんでした。



斜面に広がるズリ場



若杉山辰砂採掘遺跡出土 石器（写真提供：徳島県）

若杉山辰砂採掘遺跡から読み解く弥生時代交易社会

今回、指定答申を得た若杉山辰砂採掘遺跡は、那賀川の南岸の東西に展開する水銀鉱床群の一角に位置します。採掘は弥生時代後期初頭（紀元1世紀）にさかのぼり、硬い岩盤を穿った大がかりな辰砂採取の実態が初めて明らかになりました。ここで辰砂鉱石を集め、ある程度精製していたことは以前の調査で分かっていたことが、鉱脈を追ってチャート岩盤を10メートル以上掘り込んだ横坑や、石灰岩を掘り割った深さ4メートルを越える堅坑は、想像を超えるものでした。



徳島文理大学教授 大久保 徹也さん

阿波の水銀鉱床群の資源利用が縄文時代後期（紀元前2400年頃）にさかのぼることは那賀川沿いの深瀬遺跡出土の辰砂鉱石等から確実に

す。しかし、その存在は長く忘れられてしまったようです。弥生時代中期後葉（紀元前1世紀）に至って再びこの辰砂資源が注目され、若杉山辰砂採掘遺跡に見るような本格的な資源開発採掘が始まりましたが、それには鉱脈の探索や採掘の新しい技術の導入が不可欠であったことでしょう。加茂宮ノ前遺跡の鉄鍛冶工房は新技術導入の一端を示しています。若杉山の辰砂採掘は少し遅れて始まりですが、紀元前1世紀にさかのぼる採掘遺跡が周辺に存在することはまず間違いありません。列島社会では紀元前1世紀に交易活動が急速に活性化しました。各々の自然条件や資源分布に応じた交易用特産品の確保が模索され、例えば備讃瀬戸海域では集約的な塩生産が始まりました。この頃、瀬戸内海沿いの高所に営まれた航路監視所高地性集落も交易の活発化に連動しています。また、北部九州に持ち込まれた中国産辰砂が目につくのもこの頃です。貴重視された舶来辰砂の流入が、忘れられていた辰砂資源の存在を想起させ、本格的な資源開発特産品生産を引き起こした可能性を考えます。若杉山辰砂採掘遺跡は「大交易時代」の産物であり、列島社会の変容を雄弁に物語っています。

歴史的意義と今後の活用

古代、辰砂は金よりも価値が高かったといわれています。この鉱物には古代から現在に至るまで、私たちに不思議な魅力を感じさせる力があります。邪馬台国の記述で有名な通称「魏志倭人伝」にも辰砂は登場します。同書には魏と邪馬台国の交流が記されていますが、有名な記述としては、魏から邪馬台国への贈り物として銅鏡100枚が授けられたとありますが、ただそれだけではなく、辰砂も送られているのです。また邪馬台国からも日本産の辰砂を魏に献上しています。



若杉山を上空から撮影。山の傾斜地に遺跡が広がります。谷には、希少なカタツムリ「アナムシオイガイ」などが生息する自然の宝庫です。

さらに「其山丹有」と記載されています。丹は辰砂を指しており、日本では辰砂が取れることを記載しています。現在のところ、「弥生時代後期から古墳時代前期（1世紀半ばから4世紀初め）にかけての辰砂採掘遺跡」



柳沢 久美さん

若杉山辰砂採掘遺跡の地元 水井町総代で、NPO法人 加茂谷元気なまちづくり会事務局長の柳沢久美さんに、本遺跡の活用などについてお話を伺いました。

一水井町にある遺跡が国史跡に指定されます。地元の人間として誇らしいです。住民の郷土愛に繋がればと思います。

一貴重な遺跡をどのような形で公開していくことが望めますか。

町には、遺跡のほか太龍寺道、由岐鉱山跡、希少なカタツムリや野鳥など、歴史・文化や自然がたくさんあります。町全体の魅力を知ってほしいです。

一遺跡を地域資源としてどのような形で生かしていけば良いと思いますか。

加茂谷地域には、加茂宮ノ前遺跡や深瀬遺跡などもあります。地域全体で遺跡を生かし、まちの活性化に繋げていければと思います。



九州国立博物館名誉館員 放送大学客員教授

本田 光子さん

弥生・古墳時代の遺跡からは、朱とベンガラ（硫化水銀）の赤色顔料が出土します。朱（硫化水銀）は天然には辰砂を砕いて得られ、ベンガラ（酸化第2鉄）は赤土・黄土・赤鉄鉱・褐鉄鉱等を焼く・砕く等により作られます。

2つの赤色顔料は、土器や木器等の彩色や、埋葬施設・遺骸に施されました。縄文時代の器物には両者の赤色が用いられ、東北地方の後晩期の墓からはベンガラが出土します。弥生時代の始まりと共に近畿地方と北部九州地方の墓で少量の朱が使われ、その後特に北部九州の甕棺墓で多量の朱が出土します。一方、弥生時代の土器は焼成によりベンガラが赤が発色するものであり、朱は特殊な木器や土器として銅鐸などだけに使われています。

若杉山辰砂採掘遺跡が営まれた弥生時代後期には、西日本で2種の赤色顔料の使われ方が大きく変貌します。特に朱をめぐるさまざまな出土例から想定される事象は現代の私た

弥生・古墳時代の赤色顔料「朱」の謎 ―若杉山辰砂採掘遺跡から見えてくること―

中には謎としか言いようがないことかもしれない。数十キロにも及ぶ朱と共に遺骸を葬る、一方では棺にはベンガラを塗り遺骸の頭胸部には朱を施す使い分けが始まります。また、外面には黒い煤が、内面には真っ赤な朱が残る異形の土器や勾玉を逆さにしたような形の石杵磨面にべったり残る深紅の朱。何のために作られたのように使われたのでしょうか。この時期に端を発する赤色顔料の在り方は、古墳時代に日本列島の各地へ広がっていきました。

若杉山辰砂採掘遺跡ではその産状と採掘状況を詳細に知ることができ、周辺地域に時間軸地平軸共に確認される朱関連遺跡の状況や出土辰砂の特徴と各地出土朱の比較等、今後も続く調査研究は朱をめぐる多くの謎を解く極めて重要な鍵となります。遺跡に遺された赤紫色の辰砂粗粒からも弥生・古墳時代の人々が朱を強く求めたわけが見えてくるでしょう。

入場無料・申込不要

「若杉山辰砂採掘遺跡」

国史跡指定記念シンポジウム

場所 情報文化センター コスモホール

日時 9月7日(土) 13:00～17:00

報告・基調講演

『若杉山辰砂採掘遺跡の概要』

阿南市文化振興課 事務主任 向井公紀

『若杉山辰砂採掘遺跡から読み解く弥生時代交易社会』

徳島文理大学教授 大久保徹也さん

『弥生・古墳時代の赤色顔料「朱」の謎 ―若杉山辰砂採掘遺跡から見えてくること―』

九州国立博物館名誉館員、放送大学客員教授 本田光子さん

パネルディスカッション テーマ「若杉山辰砂採掘遺跡の歴史的価値と今後の活用を考える」

コーディネーター 早淵隆人さん（徳島県文化資源活用課） パネリスト 本田光子さん、禰亘田佳男さん

（大阪府立弥生文化博物館長）、川畑 純さん（文化庁文化財第二課）、高島芳弘さん（元徳島県立博物館長）、

石田啓祐さん（徳島大学名誉教授）、大久保徹也さん、柳沢久美さん、岩浅市長、向井公紀

問い合わせは 文化振興課（☎22-1798）へ